

幻の寺

八辺を歩く

読み方のむずかしい地名が市内にいくつかありますが、吉田地区の「八辺」もその一つでしょう。

県道106号八日市場佐倉線を多古方面に向かい木積（豊栄地区）を過ぎ、「八辺入口」の看板を右に入ると集落があります。

千葉県内で台地や丘陵地の



真福寺跡に残る墓石

中で一段低くなった谷あいの土地や田んぼが「ヤツ」や「サク」とよばれ、「谷津」「谷」などと表記されています。八辺区内には貝塚や古墳など古代遺跡があり、集落は中世から形成されたとみられ、そうした地形から生まれた地名と考えられます。区のはば中央の一段低いかなり広い場所に小さな堂があり、ここに

「幻の寺」ともいえる真福寺がありました。

同寺は米倉（中央地区）西光寺の大檀那・椎名氏の支援を受け1500年代に建てられたと考えられます。この寺の住職に同所鈴木氏の出と伝わる照海という僧侶がいました。

照海は江戸に出て、1605年に徳川家康にお目見えを許されるほどの地位に上りつめました。そして幕府重鎮の青山常陸介忠成の援助で江戸・愛宕下に

寺を建て、寺の名を八辺と同じ真福寺とし住職となりました。

1591年徳川家は、有力寺社に対し土地を与えました。これが朱印地で、それを下知させるのが朱印状です。この時、市内では飯高寺（30石）、西光寺（20石）、真福寺（12石）、松山神社（10石）の3寺1社が朱印地を得ました。真福寺に関する史料はありませんが、他の記録から八辺村の土地およそ一町数反歩を同寺が拝領したとみられます。

朱印状には江戸時代初期「谷部」や「矢部」と村名が書かれ、1685年頃から「八辺」となったとされています。

1852年の同村の家数は32軒、その多くが日蓮宗妙福寺の檀家で、真言宗真福寺は明治初年に朱印地が政府に返されたため廃寺の道をたどったと思われる。寺跡には数基の墓石が残るのみですが、4月のお大師参りには小堂にも立ち寄ります。

同区妙福寺裏山の「根渡神社」は、珍しい神社名として関心が持たれています。

（元 市職員・依知川雅一）

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080